

## 藤田と Foujita

### 紹介者



### 村上雅彦氏

ロンバー・オディエ・ダリエ・ヘンチ・ジャパン 取締役社長



### 加藤丈夫氏

富士電機ホールディングス 相談役



### 次回は

### 津野正則氏

(ラッセル・インベストメント・グループ 取締役会長)  
にご登場いただきます。

**最**近出かけた展覧会で最も興味深かったのは、東京の国立近代美術館で開催された「藤田嗣治回顧展」だった。

青年期から晩年まで多彩な活動を続けた藤田の主要作品が一堂に会する貴重な機会である。

藤田は（江戸時代の浮世絵師たちを除けば）ヨーロッパを中心とする世界の画壇で一流と認められた唯一の日本人と言ってよいだろう。

独特の色彩と柔らかな線で描かれた裸婦、猫、少女や藤田自身……、さらに万国風俗の作品群の中で、今回一際目立ったのは、太平洋戦争の最中に描いた「アツ島玉砕」「サイパン島同胞臣節を全うす」をはじめとする一連の戦争画である。しゃれて明るい他の作品と違って、暗黒の画面一杯に描かれた無数の兵士たちの表情は、苦しみと悲しみに溢れ、戦争という過酷な現実を身体全体で受け止めているように見える。

戦後の藤田はこれらの戦争画によって、戦争協力者のレッテルを貼られ、日本の画壇から追われるようにして祖国を離れることになったのだが、改めてこれらの作品を観ると「これが国民の戦意を高揚すると非難された絵なのか」と不思議に思わざるを得ない。

それは決して戦意を高揚するものではないし、反戦思想を訴えるものでもなく、ただ“芸術家の眼で見た戦争”のありのままの姿であるように思う。

藤田が日本を後にするとき、「絵描きは絵だけを描いてください。仲間げんかをしないでください。日本画壇は早く世界的水準になってください」と言い遺した。その言葉からは日本画壇の仕打ちに対する天才の無念の思いが伝わってくるような気がする。おそらく当時の日本画壇には「パリで人気のあるオカッパ髪のヘンな画家」に対する偏見と嫉妬があったのだろう。だから藤田はフランスを永住の地として“Leonard Foujita”という名前で生きざるを得なかったし、最後には夫人とともに日本国籍も抹消することにもなった。

戦後60年を過ぎて、幸いなことに“Foujita”は“藤田”として日本に帰ってきたが、私たちは過去に藤田を追い出したような偏見や嫉妬から抜け出ることができただろうか？ 狭いムラの序列や価値観に囚われて優れた才能を見逃していることがないだろうか？

展覧会を観た後の爽やかな感動に浸りながら、こんなことを考えた。